

狂俳に見る名古屋の庶民感覚

富田 和子

はじめに

「芸どころ名古屋」とうたわれながらも、関東・京阪の間にあつて、等閑視されがちな名古屋地方の庶民の文化や生活感覚を、江戸時代末期に万巻堂から継続して刊行された『たまかしわ』^(注1)と『狂俳苗代集』^(注2)『狂俳田植うた』^(注3)に収められた作品から考察してみたい。

第一項では風流生活の一般化として風情や文学を男女共に楽しむゆとりを、第二項では上方と江戸風俗への批評として京・上方や江戸のイメージと流行の風俗批評を、第三項では一般庶民の生活や感情として日常の生活感情と生活観、恋の心情を、第四項では世相描写や時代感覚として世相描写と時代感覚、宗教・信仰などを紹介し、庶民感覚を考察する。最後に補項として、名古屋の指輪を紹介し、名古屋地方の重要性を確認したい。

『たまかしわ』 千秀亭柏光撰。初編（嘉永二年序。なお慶応元年と奥書の写本現存）・二編（嘉永四年序）・三編

(同六年序)・四編(安政二年序)・五編(安政四年頃刊。明治十年代の後刷本現存)・六編(安政六年序)・七編(安政末刊)まで現存。

『狂俳苗代集』

彩霞楼野口令雅撰。初編(安政四年序)から三編(裏表紙に「文久二年弥生」と墨書あり。)

『狂俳田植うた』 令雅撰。(令雅は卓池系俳人。明治八年から『狂俳眼りざまし』を毎年六編まで刊行。)

なお、引用句の片仮名ルビは原文通り、平仮名ルビは富田による。

(1) 風流生活の一般化

◎風情を楽しむゆとり

① 指につく埃ほこり

墨画懸たら秋らしい

『苗代集』初

掛け軸の箱のほこりを指で払って、墨画を懸けてみたら秋らしい気分になった。

② 秋風

墨画の寂さびに気が締しめる

『苗代集』三

秋風が感じられる頃は、掛けかえた水墨画の墨色に閑寂をみるようで気持ち引き締まる。

③ 寂のついた岩

河鹿たのしむ庭深い

『苗代集』二

「河鹿」はあおがえる科の蛙の一種。夏から秋にかけて石上で美しい声で鳴く。秋の季語。古色のあるゆかしい岩の上で鳴く河鹿のころころという美しい声は広い寺院の庭には相応しい。

④ 炉開

寅ナナツ刻出にして一畳さす

『玉柏』六

「炉開き」は旧暦十月の初旬に風炉を片付けて炉を開き、釜を懸けて茶会を催すこと。冬の季語。「寅刻」はここので

は午前四時。「さす」は「差す」で差し入れる意。炉開きの茶会のために、まだ夜の明けやらぬ午前四時に起きて準備をする。一枚の畳を抜き取って、半畳の畳に取り替えて、炉を建てて客を待つ。茶事の始まる前の心地好い緊張感。

⑤ 秋の夕

ちさな心になります

『苗代集』初

「小さな秋」はサトウハチロー作詞の「ちいさい秋みつけた」で聞き覚えのある表現である。秋の夕べには寂しい心に成りきる。

⑥ 秋の夕日

釣て行碑の辞世読む。

『苗代集』三

「秋の日は釣瓶落とし」といって、秋は日脚が短くて急速に暮れる。碑と日の掛言葉か。急速に暮れる秋の夕日に照らされた釣って運んで行く碑に刻まれた辞世を読み、はかなさを感じている。

⑦ 御手洗の緋鯉

散る卯の花に飛揚る

『玉柏』四

「御手洗」は御手洗川の略。神社の近くに流れて、参詣者が手を清め口をすすぐ川。特に賀茂神社・比叡山のものがある。「卯の花」は初夏に小さい白い花が穂状に密生して咲く。夏の季語。古くから桜・躑躅・雪などと同様に呪法に使われた。清流と緋鯉の赤と卯の花の白の色の対比が美しい。御手洗川の緋鯉が白い卯の花が散るのを餌と間違えたのか、勢い良く飛び上がった。

⑧ 鐘霞夕

緋鯉の狂ふ水笑ふ

『苗代集』初

「霞む」で春。鐘の音が霞んだように微かに聞こえる春の夕方、緋鯉にえさをやると、狂ったように集まって来て、その辺の水が飛び散って、静かだった水面が笑ったようにくしゃくしゃになった。

⑨ 若楓

香で数寄屋の湿ッ気抜く

『苗代集』三

「若楓」は楓の若葉の略で夏。「数寄屋」は茶室。楓の芽がようやく葉に育った初夏には、香を焚いて茶室の湿気を

抜く。

⑩ 洗髪

春待斗のしらべ弾く

『苗代集』三

「春待つ」で冬。髪も洗って身なりは新春を待つばかりに整えた娘が、正月の弾き初め会用の新春譜の曲を練習して弾いている。

⑪ やさしい膝

鎔^{かぎ}って貰^{もら}ふ鞠^{まり}見とる

『苗代集』初

「鎔」は金属でかざる意。優しい暖かい膝と感じる。幼子が母の膝に座って髪に飾ってもらう鞠のついた簪を嬉しそうに見ている。鞠^{まり}子は幼子、鞠^{まり}育は養い育てる意。

尾張・三河・美濃は俳諧の盛んな地方であったから、この程度の風情を楽しむゆとりや感覚をもっていても不思議ではないだろう。

◎ 文学を楽しむゆとり

① 呑仲間

江戸から狂哥書てこす

『玉柏』二

江戸に行った酒呑み仲間が、狂歌を送ってよこした。あちらでも愉快に呑んでいるらしい。

② 黄実の萬年青^{オモト}

平字^{へい}仄字^{へつ}の論しとる

『玉柏』三

「万年青の実」で秋。万年青はユリ科の常緑多年草で、実は球形で赤く熟し、まれに黄色もある。珍しい黄色の万年青を囲んで、漢詩の平字・仄字の論争をしている。

③ 冬至のお燈

漢語^{カンゴ}で洒落^{シヤレ}る所作^{ショサ}ごつ

『玉柏』五

「冬至」で冬。北半球では一年で一番昼間の短い日。冬至の日に一陽来福を願って神仏にお灯明を供えるのだが、慣れない漢語で洒落るしぐさがこちない。

④ 吹込梅が香 韻字探って一座凝る

『苗代集』三

「梅が香」で春。学問の神様として祭られる菅原道真の飛梅の故事や中国の晋の武帝の「文を好めば則ち梅開き、学を廃すれば則ち梅不開」の故事（ここから「好文木」は梅の異名。）など、梅と文字の連想は深い。甘い梅の香りが漂って来る。梅の題の詩の韻字をさがして一座が一所懸命になっている。

⑤ 関羽程有髭 雪見の酔で詩誦高い

『苗代集』三

「雪見」で冬。中国の蜀漢の武将で有名な関羽のような見事な髭をはやした男は、雪見の酒で酔ったのだろう。詩吟の調子が声高い。

⑥ 桐の唐卓 一羽出た蚊を詩で憎む

『苗代集』三

「蚊」で夏。桐の白い唐卓の前では、夏の初めに一匹出てきたうるさい蚊を叩き潰す訳にもいかず、ただ蚊を憎む詩を作って楽しんでいる。蚊を一羽と数えているので、蚊の大きさとうるさい羽音が感じられておもしろい。

⑦ 雨の海棠 古今集葉って飯に立つ

『苗代集』三

「海棠」はバラ科の落葉低木で、若葉は赤みを帯び、晩春の頃、花梗の長い紅色の花が房状に垂れて集まり咲く。古くから観賞用に栽培。春の季語。「海棠の雨に濡れたる風情」は美人の憂い顔の比喩。春雨の降る中で赤い美しい海棠の花が咲いている。憂い顔の美しい女性を思っ、読みかけの古今集に葉をはさんで食事立つ。

⑧ 柴ざくら 螺鈿机へ歌書運ぶ

『苗代集』三

「芝桜」はハナシノブ科の多年草。春、花は桜に似、芝のように地面をおおって咲く。かわいらしい芝桜の咲く野

原に持ち出した螺鈿の美しい机に歌集を運ぶ。早春の浮き立つ気分。

⑨ 唐桑の眞盆タマコボン 酒好シユカ(家)で李白リハクの軸秘藏デグヒズナ

『苗代集』三

「唐桑」は中国から渡来した桑の木材で、木目が美しい。美しい木目の唐桑の眞盆を持つてゐる主人は酒好きで、酒好きで有名な唐の詩人李白の軸が秘藏だそうだ。

⑩ 落掛シる椎 石に大学忘れたる

『田植』

「椎落ち葉」で夏。椎は常緑喬木。椎の葉が落ちかかっている石の上に「大学」の本が忘れてある。高い椎の木陰の下にある石の上で寺子屋通いの子供が昼寝でもしていて、そのまま遊びに行ってしまったのだらう。習い初めの「論語」ではなく、少し上級の『大学』で年齢が想像される。

⑪ 麦秋 本陣に書画の会が有る

『玉柏』三

「麦秋」は麦の実り熟す頃で、初夏。陰曆四月の異名。夏の季語。「書画の会」は書画を書いたり陳列したりする会。文人が、茶屋などに同好者を集めて、書画を書き、あとで酒宴などを催すもの。初夏のさわやかな頃、本陣で書画会が催される。

江戸時代の民衆の学び楽しむゆとりのある態度や、文学的素養を自然に身につけていた様子が察せられる。

◎ 文学的素養を持った女性への敬意

① 画を書娘 御旗本出で品ンが有

『玉柏』初

絵を書くような教養のある娘はさすがに御旗本出身らしく気品がある。

② 神主の奥サマ

詠アス哥の筋が能ひ

神主の奥様はさすがにお詠みになる和歌の筋が良い。

③ 垢抜かして

女子の筆た思はれぬ

「垢抜ける」は容姿・態度・技芸などに洗練されて素人離れしていること。素人離れしていて、女性の書いたものとは想像できない。絵か書か手紙か。「垢を刮り、光を磨く」（『韓愈』進学解）は人材をつくる意。

文学的素養は敬われ、女性も風情や文学を楽しんでいる様子が窺える。

(2) 上方と江戸風俗への批評

◎ 京・上方のイメージ

① 京風ウの髪

おばせて行子ニ水くさい

京風の髪形に結った奥様は、お供の者におんぶさせて連れて行く子供によそよしい。

『玉栢』二

② 京の伯母サン

コスイ饒別お呉れたり

「コスイ（狹い）」はけちである。京の伯母さんはケチな饒別を下さった。

『玉栢』三

③ 京の伯母サン

野廂^{ノハカス}顔が身奇麗な

京の伯母さんは顔はそばかすだらけでもさすがに身綺麗な格好をしている。

『玉栢』五

④ 蒔画の衣桁

京から着た雛かざる

『玉栢』初

「衣桁」は着物掛け。蒔絵の施された美しい衣桁の側に、わざわざ京に注文した品の良い立派な雛人形を飾る。豊かな家。

⑤ 芝居師の内

カヤク雑煮で上ミ風ウな

『玉柏』三

「内」は家内・内義の略。「カヤク」は加葉で、炊き込み飯やそば・うどんの類などに、色どりに混ぜいれる具。芝居の興行師の奥さんの作る雑煮は彩りが美しく上方風ね。

⑥ 真しの出た帯

亭主手曳に上ミ諷な

『玉柏』七

「真しの出た帯」は、破れて芯の出た帯。妻はやつれて帯も破れているのに、目の悪い亭主の手を引いて行きながら歌う歌は美しい上方風の歌ね。上方落ちの流しの夫婦の様子。

◎江戸のイメージ

① 冬牡丹

蒸籠で蕎麦ハ江戸風ウな

『玉柏』五

「冬牡丹」は冬に咲く小型の牡丹、冬の季語。冬牡丹の咲く頃、蒸籠で蒸した蕎麦切りの作り方は江戸風だね。珍しい。

② 江戸画張た壁

鼻に小額ヒクライ拔せとる

『玉柏』五

「江戸絵」は江戸製の一枚摺りの浮世絵。後、江戸土産としての錦絵全般。「小額」は髪のかい方の一。左右の髪を大きくとって、額が狭く見えるようにしたもの。『賤のをだ巻』（一八〇二年春序）に「男のひたいも、小額を置いて際を付ず、上計り額をすこし角を入、ぬきたるが温和にて、若きものは甚見付もよろしきゆへ流行出たり」（『燕石十種』一所収）とある。江戸土産の錦絵を貼った壁の前で、その役者絵風に、妻に小額の角入れに髪を抜かせて、真似させ

ている。

③ ヲ、怖コウ

すんでに江戸な猪口貰ふ

『玉柏』六

「すんでに」はもう少しの所で。「猪口貰ふ」は固めの盃を交わす意。おお怖い。もう少しのところで江戸へ飛ばされるどころだった。危ない女に誘惑されて、引つ掛かって猪口を貰っていたら。危ない、危ない。江戸行きは左遷。

④ 彫ほりで埋かゝる骸がら

口程江戸ハ明るない

『田植』

体中入れ墨をして、粹がつて江戸っ子ぶっているが、本当は江戸の事は知らない。

⑤ 江戸新形の浴衣

額の這入た猪口交る

『苗代集』二

江戸で流行の浴衣には、役者が絞を図柄にして染め抜いたように猪口が額縁の中に入った図柄が混じっておもしろい。洒落たのも混じっている。

⑥ 江戸弁シの娘

相合傘カギも平気ヘイキなり

『田植』

江戸から流れて来た芸妓は、さばけていてこんな田舎に来て人目も憚らず相合傘も平気です。

◎ 流行の風俗批評

① 伊達盛り

此寒イのに素足なり

『田植』

伊達を気取っている奴は、こんなに寒いのに素足で我慢している。

② 眼から鼻へぬける男 今に高利で苦しがる

『玉柏』初

眼から鼻へぬけるような色男を気取って、金もないのに流行に敏感に対応するために利息の高い借金をした奴は、その内、返済に困って苦しむ。

③ 流行ニ結ふ髪

惚るも飽くもア、早い

『玉柏』四

流行の髪形に飛びつくような流行物好きの娘は惚れるのも飽きるのも何と早いのだろう。

④ 陽気娘⁺

小柳の風俗^フ腹筋ナ

『田植』

「小柳縹子」は本絹縹子の一。縹子は平滑で光沢に富み、地厚。特に小柳縹子は黒地を主とし、帯地、半襟地、力士の褌などに用いる。「腹筋ナ」は滑稽である。陽気な娘の上品な奥様風の黒縹子の帯姿は似合わない。

京・上方・江戸のイメージや流行の風俗批評は現代まで残されていることを感じる。

(3) 一般庶民の生活や感情

◎ 日常の生活感情

① 白足袋で出かけ

町へまハってハガキ買フ

『玉柏』初

「ハガキ」は、江戸時代、銭湯などの代金前納者に渡す小紙片。「銭湯へ羽書で行は品がよし」柳樽12（安永六刊）。ここでは参宮の準備のために買う伊勢の神主連合で発行した紙幣（鈴木勝忠著『東海の言葉辞典』）。身綺麗にして白足袋に履き替えて出かけ、わざわざ町へ回って参宮の準備のために葉書を買う。

② 一枚着かへ

首動かして見とれたり

『苗代集』初

ちよつとよそ行きに一枚着替えると、姿見の前で首を動かしてポーズをとって我が姿に見とれてしまう。

③ 畳小袖

哀な幕がわすられぬ

『玉柏』初

よそ行きの小袖の着物を畳みながらも、今日の芝居の哀れな幕切れが忘れられなくて思い出してしまうから、なかなか畳めない。

④ 今の一言ン

悴^{せがし} アどふでも私しが去る

『玉柏』六

「去る」は離縁する意。今の一言、聞き捨てならぬ。息子はどう言ったって、私はあんな嫁は離縁させてやる。嫁姑喧嘩。

⑤ 黙^{ダマツ}て居れ

酒価^{サカデ}ア旦那がお腹にな

『玉柏』六

女房に向かつて「黙っていないさい。酒代は旦那のおごりなんだからな。心配するな。」

⑥ 叩かれる背中

待つとつたよな気が仕出す

『玉柏』二

ボンと背中を叩かれて呼ばれたが、あまりのタイミングの良さに何だか待ち伏せされていたような気がし始めた。何だか気味が悪い。

⑦ 跨越す垣

連^{つれ}の呼方へ道が無イ

『玉柏』初

連れとはぐれてしまったが、呼ぶ声があるので垣根をまたぎ越そうとするが、そっちは崖で行く道がない。

⑧ 長雪隠

打かけて有碁がまけな

『玉柏』五

「雪隠」はトイレ。トイレに立つてからなかなか戻って来ないのは、勝負途中の囲碁が負けそうだから。いつまで一人で考えているのだろう。または、もう負けが決まっているのにどうして早く戻ってこないのだろう。早く終わらせて次の勝負をしておきたいのに。

⑨ 算盤枕

当月限二あぐんどる

『玉柏』二

算盤を枕にしても何ともならないのだが、何ともならない今月期限の支払いにいい方法はないかと考えあぐねてい

る。

⑩ こわい事

式歩有リヤコンナ節季せぬ

『苗代集』三

「金二分」は現在の五万円位にあたろうか。「節季」は年の暮で冬の季語。こわい事だ。年の暮に金二分有ったならこんなつらい言い訳ばかりの年越しをしなくても済んだのに。

生活感情は複雑。

◎ 日常の生活観

① 菊の香

発句の下書で障子張る

『玉柏』六

「下書」は句会興行の下準備の帳面で、興行側の手控え帳。または清書の前の下書き。菊の香りの漂う秋には、冬仕度のために、発句会の下書をほどこいて、破れた障子を張りかえる。

② 銭の降店

ことしも酒の出来がエイ

『玉柏』初

銭が降っているように見える酒屋は、お客がどんどん来て威勢良く儲かって仕方がない。それは今年も酒の出来が良いからね。

③ ダ言葉の下女

在所流儀ニ枕伏せる

『玉柏』初

田舎から出てきたばかりの訛のひどい下女は、まだ奉公先のやり方を知らないので、慣れた故郷のやり方でお膳に並べるお椀を伏せる。生活習慣の違いに奇異な印象。

④ 慇懃ナ物言

子も家督せりや軽うない

『玉柏』二

あんな子供でも家督を相続すればご主人だから、軽く扱えないから慇懃な言い方をせざるをえないのだ。

⑤ 囁く廊下

おおひら
大平の匙江らかす

『玉柏』四

「大平」は蓋つきの大きな平椀。また、それに一つ盛りにして出す料理。仲居も廊下でひそひそ囁く噂話に夢中で、運んでいる大平椀に盛った料理用の匙をすべらせて落してしまった。

⑥ そふましい風聴

フイコウ
染る染艸持や染る

『玉柏』七

「そふましい」は騒がしい。騒がしい噂が広がっている。色染めに使う染め草を手についたら、その手が染まってしまうように、騒がしい噂を聞きつけたら騒がしくなる。

⑦ 猫

百両包嗅で見ると

『玉柏』初

「猫に小判」とはよく言ったもので、焼いている秋刀魚をくわえて逃げるようにはしないで、ただ猫は百両の包みをうさん臭そうに嗅いでみるだけ。

⑧ 折て見る指

猫二とられた丈足らぬ

『玉柏』二

指を折って数えてみると、宴会のために準備した客用の鯛が猫に取られた分だけ数が足りない。

◎恋の心情

① 思ひきれぬ恋

メ直しても帯餘る

『玉柏』二

思い切ることのできない恋に悩むお嬢さんは、食がすすまないから痩せてしまって、何度帯を締め直しても丈が余ってしまふ。

② 初二逢ふ恋

式人にしたら埒明ぬ

『玉柏』初

恋しくて初めて二人で逢った恋心は、二人だけにさせたらずぐずして片付かない。お七と吉三郎が初めて二人になった場面、「何とも此恋ははじめどかし。後はふたりながら涙をこぼし不埒なりしに」(西鶴『好色五人女』四の二)を思い浮かぶ。

③ 読で貰ふ文

急く氣しづめる唾^{ツバキ}呑む

『玉柏』二

読んで貰う手紙を前にして、はやる氣持ちを鎮めるためにゴクツと唾を飲み込む。待ち兼ねている恋心。

④ 冷る足

飛石つたふ胸おどる

『玉柏』初

夜が更けて冷え込んだので素足ではとても冷える。が、こっそり部屋を抜け出して飛石づたいに約束の場所に
出かける胸の内はわくわくして暖かい。

⑤ 燃立胸

鏡へ吹た息晴れぬ

『玉柏』四

恨みの炎で燃え立つような胸の内では、気分直ちに鏡台の前に座って化粧をしようとしたが、吐息で曇った鏡が晴れないで曇ったままのように、憂鬱である。

恋の心情にはさまざまな場面がある。

(4) 世相描写や時代感覚

◎世相描写と時代感覚

① 通し駕の旅

印籠摺れで真綿吹く

『玉柏』二

「通し駕籠」は途中で乗り継ぎしないで目的地まで同じ駕籠を乗り通して行くこと。通し駕籠に乗って一刻を争うように街道を急ぐ旅は、腰に付けた印籠が擦れて着物の真綿が吹き出している。急ぎ旅の大商人の出現か。

② 夕みぞれ

ちらしのきいた継場込む

『苗代集』三

「みぞれ」は雪が雨まじりに降るもので冬の季語。「継場」は街道の人馬のつきかえをする所。宿場。「ちらし」はお触れ書。薄暗くなる夕方に雲が降るような日は一層暗くていやな寒さだが、お触れ書の影響のあつた継場はまだ混んでいる。

③ 真白ナ足袋

何積で居る舟玄ひ

『玉柏』六

黒船か。ペリーの浦賀来航はこの年の六年前の六月。船で立ち働く人足の真つ白な足袋が目立っている。何を積んでいるのだろうか。船体の黒い船は。

④ 毛唐人め

何時迄騒弾かしとく

『玉柏』六

「弾く」と「引く」を掛けるか。「弾く」は三味線の音を連想。外国人の奴、何時まで騒いで、芸者をあげて三味線を弾かせて、世の中を騒がしておくのか。畜生め。

⑤ 天下まハリ持

藪が伐れたら日も当る

『玉柏』六

天下は回り持ちと言うから、鬱蒼として遮っていた大きな竹藪が伐れたら、こんなあばら家に日も当たるようになるだろう。世直し。

⑥ 気にかゝる夢

飛脚の兒がハヨ見たい

『玉柏』四

世間の物騒なこの頃、気にかかる夢をみてしまった。道中無事との手紙を早く読みたいから、飛脚が来るのが待ち遠しい。道中不安の情勢。

⑦ 破れ太鼓

兄のそだった世と違ふ

『玉柏』七

兄の育った世の中とは違って、おれは破れた太鼓のようなもので、兄のように行かない。

⑧ 雪解の駅

うせた唐人風邪流行

『玉柏』五

「雪解」は春の季語。「駅」は宿場。「うせる」は行く・去るを卑しめていう語。行きやがる。「うせた唐人」と「唐人風邪」とを掛ける。「唐人風邪」はインフルエンザ。雪解けの春になった宿場町では、外国人が出て行きやがった後にひどいインフルエンザが流行っている。

⑨ 霞む平山

亜墨利迦發燭袖で摺る

『玉柏』七

作者は「東陵」で、岩津は現在岡崎市北部の岩津町。「平山」は現在豊田市平山町にある平山古墳のことか。「亜墨利迦發燭」は黄燐マツチのこと。現在の安全マツチと違って、どこで擦っても火が付く。なだらかな平山古墳が霞んで見える時分になった。灯をつけるのに今はマツチを袖で擦る。

明治維新を迎える庶民の側には、封建制度下にあっても、何となく時代が変化しつつあることを予感していたらしい。

◎ 宗教・信仰

① 権化の衆

桶の伊勢芋遣りたがる

『玉柏』二

「権化」は仏語。仏菩薩が衆生を救済するために、仮に人間の姿にかえて、この世に現れること。また現れたもの。「衆」は僧のこと。「権化の衆」は権化を装った乞食坊主。「伊勢芋」はナガイモの一品種。主に三重県地方で産する。

食用。菩薩の化身を装った乞食坊主は、他人が洗っている桶の中の伊勢芋を我が物のように与えたがる。

② 権化衆

煮酒の釜を覗き込ム

『玉柏』二

「煮酒」は二月頃作られた新酒を、保存のために、陰暦四月中の小満の節の前後に煮立て殺菌したもの。夏の季語。菩薩の化身を装った乞食坊主は、保存のために煮立てている新酒の釜を覗き込んで欲しがる。

③ 杜若

飢饉此方尼をらぬ

『苗代集』初

「杜若」で春。二年前の安政二年は東海地震・暴風雨で凶作。諸国も同様。伊勢講のお陰参り起こる。「尼」は本来、出家得度して具足戒を受けた女性だが、近世には俗化して遊女のようになり、諸国を巡回している者もいた。歌比丘尼。杜若の咲く春になったが、この辺りには飢饉以来ずっと施しがないから尼さんがいない。

④ 落葉

喝僧の行者はやつとる

『玉柏』三

「落葉」で冬。「喝僧」は男の髪形で、月代を剃らないで、全体の髪をのばし頭上で束ねたもの。主に坊主・医者・老人など。また、束ねないで垂れ下げた髪形。総髪。「行者」は修験道を修行する人。山伏。落葉の散り敷く冬となったが、髪を伸ばしたままの乞食行者が流行してやたらに多い。祈祷流行。

⑤ 泊て居行脚

雪女見た説が出る

『玉柏』六

「行脚」は諸国を巡って修行する禅僧。泊まっている禅僧から雪女を見たという話が出る。

⑥ 真白な眉

漁師から今説法者な

『玉柏』六

真白な眉の男は昔は漁師だったが今では説法を説いている。

⑦ 餓鬼大将

あんな和尚二成らしたり

『玉柏』二

かつての餓鬼大将があんな立派な和尚になられた。

⑧ 蟹の這ふ軒

網で揚った像流行る

『玉柏』五

「蟹」は夏の季語。作者は「竹溪」^{梅森}で、梅森は現在日進市で海と隣接しておらず、南部は水害に因る砂入地も少なくない。ここの蟹は沢蟹か。軒を沢蟹が這っているような川辺りのあばらやで、大洪水の後で偶然、網で引き上げられた仏像が信仰を集めている。仏頼みの流行。因みに、現在の岩倉市石仏町は明応六（一四九七）年に水田から石仏が発掘され、地名となる。稲原寺本尊。稲原寺には明治三四年の狂俳奉納額が^{（注4）}残る。

立派な和尚に対する敬意や宗教・信仰への関心はよみとれるが、多くは冷めた眼でとらえている。

◎ 世事の観察

① 駄荷でせまい町

日差で五文串流行る

『玉柏』四

「駄荷」は駄馬や駄馬で運ぶ荷物。「日差し」は日向のこと。「五文串」は銭独楽か。筆軸の短く切ったものに文銭を五枚貫き、その管の中に細い心棒を入れ回転軸とした独楽。大人も子供も使った遊具。駄馬や駄馬で運ぶ荷物でこつた返している狭い町で、日向で銭独楽遊びが流行っている。

② 双紙持た子供

皆相撲の名で呼び合ふ

『苗代集』二

「双紙」は手習いの帳面。寺子屋通いの子供らは皆、今流行の相撲取りの名前で呼び合っている。

③ 式ツ曲突

世の取れる身で物好な

『玉柏』二

「曲突」は竈のこと。二つの竈で満足している。その気になれば御大家の主人になれる身分の長男なのに物好きだなあ。家督を譲って若隠居してしまっている。

④ 酒で太る骸

世ハ暮安ふ思つとる

『玉柏』四

酒ばかり呑んでますます太った体の奴は世の中は暮しやすいと思っっているらしい。暮らしにくくなったのに。呑気だね。

⑤ 喰い切者

役威^{イース}にッて如才ない

『苗代集』三

「食切り者」は食い詰め者のことで、貧乏や不品行で生活できなくなった者。「役威を迂る」は失業すること。食い詰めて失業した奴はお世辞良く世を渡る。

⑥ 朱鞘の大小

手の振ようが一ツ派有

『玉柏』二

「朱鞘の大小」は浪人者。落ちぶれたあの浪人者は肩を張って歩く姿に一癖あるが、無い袖は振れぬと借金を断る手の振り方にも一癖ある。

世相を描写する中にも、素朴な人間愛と、人間性への楽天的な信頼が感じられる。

(補) 名古屋の指輪

① 気の派手な妓

指輪はづさにや文書ぬ

十評卷 『苗代集』初

派手気な大袈裟に振る舞う芸妓は大して大きな指輪でもないのに、大事そうにそれを外さないと気になって手紙が書けない。

② 美しい素貌

指輪極めこむ眼が細ひ

川西卷 『苗代集』初

「極めこむ」は指にしつかりはめること。指輪をしつかりはめて、眼が細くなるほどうつとり眺めている素顔は輝いているように一層美しい。

③ 給仕盆

畳の縁りで指輪摺る

花 若 『玉柏』六

給仕盆を持って出てきた女性が、盆を畳に置くと共に畳の縁で、はめている大きくて重い指輪を摺っている。「ミノスエ」は美濃国須衛村、現在の岐阜県各務原市。

④ 仇ナ横櫛

折れ絵めくって指輪磨く

龜 齡 『苗代集』三

「折れ絵」は未詳。折れた挿絵のことか。髪に粋な横櫛をさした女性が草子を読みながらも、折れた挿絵をめくっては曇りやすい銀の指輪をピカピカに磨いている。「ニシバサマ」は西^{にし}迫^{はさま}村、現在蒲郡市西迫町。

指輪について「日本では古墳時代に大陸からもたらされたが、その後長く途絶し、〈喜遊笑覧〉(1830)に〈中国から伝来して近年江戸でもてはやされている。中国製のは白銅などで粗末なので、近ごろは江戸では銀でつくらせているが、それがなんの役にたつかは知られていない〉というようなことがしるされている。初期には〈ゆびがね〉または〈ゆびはめ〉といい、明治時代になって〈ゆびわ〉と呼ぶようになった。日清戦争のころまではおもに銀製であったが、そのうち金製が用いられるようになった。ただし指輪が用いられたのは東京だけで、京阪地方では1897(明治30)年ころでもまれであった。」(平凡社『大百科事典』)と解説される。『喜遊笑覧』の著者喜多村筠庭は江戸の人だから、江戸での風俗を書き留めた訳で、この他でも、ここの用例から既に安政四年頃の尾張・三河・美濃地方では、粋筋の女性の間だけであつたかも知れないが用いられ、〈ゆびわ〉と呼ばれていたことがわかる。また、①③から単なる銀製のリングではなく、貴石が使われていたであろう。

江戸から入って来た風俗ではあろうが、〈ゆびわ〉という呼び方が東京では明治時代になってからのことであるならば、尾張・三河・美濃地方から逆に東京に入って行った呼称なのだろうか。

まとめ

身近な事柄を言葉で切り取ることによって日常の世界がはっきりと認識され、題詠形式で身近な事柄をとらえる社交的娯楽文芸である狂俳は、日常世界の中の新発見を楽しむ。その認識は祝意や弔意であったり、世相に関する批判や身近な人々に対する思いや観察、四季・自然の賛美など、共感を呼ぶ。

先に、「狂俳に見る妻の表現と女性観」奥様・内義・御新造・噂・女房^(注5)」で、特に当時の妻という立場の女性に対する思いの一端を考察したが、狂俳は女性だけでなく人間全般を表現の対象とし、卑俗な題材もさりと表現できたのは、人間に対する深い愛情と興味が存在したからであろう。

子規によって「概ね卑俗陳腐にして見るに堪へず。」と否定された月並調俳諧と共通の作者をもつ狂俳が名古屋を中心に人気を保ち得たのは、自覚した生活の素朴な人間愛と人間の本性への楽天的な信頼を共感することができたからであろう。そして、これが天保期以後、十九世紀の中でも、特に庶民の文芸意欲を育んだ幕末から維新期へつながる時代の特徴・傾向ではなかったか。更に、検討してみたい。

(平成七年十月)

注

- (1) 鈴木勝忠編『雑俳集成』第二期10「名古屋幕末狂俳集」私家版 平4 所収。
- (2) 初編・二編 鈴木勝忠編『未刊雑俳資料』第36期6所収。三編 藤井隆氏蔵。
- (3) 架蔵。
- (4) 「稲原寺蔵明治三十四年」（奉納）「俳諧冠句一卷」の翻刻及び狂俳の動静」「梶山女学園大学研究論集」第18号第2部（昭62年2月）。
- (5) 「梶山国文学」第18号（平6年3月）。

付 記

東海近世文学会六月例会にて、口頭発表をいたしましたものの一部をまとめたものです。
なお、この課題に対し、梶山女学園大学振興会より平成七年度研究奨励補助を受けました。